虚無僧踊

虚無僧は、禅宗一派の普化宗の僧で神を剃らず僧衣も着ず深編笠をかぶり、尺八を吹いて諸国を行脚して修行する僧である。

昔の虚無僧の中には諸国の殿様の直系の隠密として活躍したともいわれ、これを迎え討つ討手と虚無僧踊の起源ともいわれているが麓西の虚無僧踊は女性的な優雅な手踊りである。

白衣、白脚絆、白足袋、草履履きで丸に十字紋をつけた黒い腹掛けを着け菅笠をかぶり、尺八を持ち、相手役は黒紋付にお高祖頭巾をかぶり、白衣と黒衣の男姿と女姿の二組で二列縦隊となって、三味線と太鼓の音に合わせゆるやかに舞うように踊るものである。

その手振りは哀愁をたたえた優雅な気品のある踊りで、串木野市や入来町などの踊りと相似している。

久見崎町の「想夫恋」形の盆踊りが原型なのだろうか。

麓西の虚無僧踊の起源は明らかではないが、島津の殿様の隠密役割を踊りとしたのではないかと推察されている。

【奉納・披露】

日程：未定

場所：未定